



平成30年は、明治改元から150年の年。日本全体が海外の国々と対抗するために、大きく変革した明治時代。では、本庄の明治時代はいったいどんな時代だったのか。激動の時代、明治。当時の本庄を支えた一つに、「養蚕」があります。養蚕の歴史、現在に残る文化や産業から、次の時代に繋げたい大切なものを探ります。

明治150周年記念特集

それぞれの繭物語



競進社模範蚕室

明治27年、児玉養蚕伝習所内に模範蚕室を建設し、現在の競進社模範蚕室となる。なお明治30年に伝習所内に作られた競進社蚕業講究所は、その後変遷を経て、現在の児玉白楊高校となる。

養蚕業の発展

江戸時代の末期に横浜が開港され、生糸・蚕種(蚕の卵)が重要な輸出品となると、横浜に比較的近い埼玉県は養蚕業が盛んになっていきました。利根川に近い地域は桑の生産に適し、大型の養蚕農家が多く育ちました。こうした農家の多くが大量の蚕種製造を行いました。繭の需要の高まりとともに、高い収繭高を目指し、養蚕を学ぼうという人も増えました。養蚕改良とその伝習・教育に

生涯を捧げた木村九蔵は、新宿村(現神川町)で養蚕改良競進組を結成。明治17年に組織を競進社に改め、児玉町に事務所と児玉養蚕伝習所を開設。全国から生徒を集め、また全国に養蚕教師を派遣しました。これにより、児玉町は養蚕改良の中心地となり、日本の養蚕業の発展に大きな役割を果たしました。

巨大な繭市場に成長

江戸時代から、本庄宿・八幡山町・児玉村に市場が開かれ、繭・生糸などが大量に取り引され



高窓を載せた養蚕住宅は現在も残っており、児玉町小平の「高窓の里」は、当時の風景を今に伝えています。

ていました。賑わいは明治以降も続き、養蚕が盛んになるにつれ取引量は増えていきました。こうして繭の一大集散地として発展したのは、明治5年の官営富岡製糸場の開設による影響が大きくありました。製糸場の所長、尾高惇忠が原料繭の仕入れのため本庄に出張し、開善寺(中央2-8-26)を借り受け生繭の買付所としたことが本格的な繭市場の始まりです。明治16年には日本鉄道会社本庄駅が開業し、その後路線の延伸により、当時原料繭の不足で

器械製糸業の発展の足かせとなっていた信州地域の製糸会社が進出が進み、より一層市場が盛り上がりました。

養蚕業の現在

こうして盛り上がりを見せた本庄の繭市場でしたが、低価格な海外産繭の進出や化学繊維の発達などさまざまな理由で養蚕業は衰退していきました。そこで、今回の特集では、かつて栄えていた養蚕業の現状を探りました。

市内でたった1か所の稚蚕共同飼育所 蚕の飼育現場を訪ねて

稚蚕共同飼育は、脱皮を繰り返して成長する蚕をある程度の大きさまで育てることをいいます。稚蚕共同飼育所は県内に2か所あり、そのうちの1か所が本庄にあります。稚蚕共同飼育を続ける星野さん。現在、どんな思いで蚕と向き合っているのでしょうか。



金屋稚蚕共同飼育所
星野邦男所長

養蚕は、良い繭が取れて当たり前。 だからこそ稚蚕共同飼育は肝心なんです。

金屋稚蚕共同飼育所では、蚕の卵を蚕種会社から受け入れて、3令(約3cm)まで育てた蚕を、県内(秩父を除く)の5つの農協の養蚕農家に引き渡す作業を行っています。養蚕に携わったきっかけは、入学した児玉農業高校(児玉白楊高校の前身)の競進社模範蚕室で養蚕の実習に参加し、興味を持ったことでした。卒業後も養蚕連、農協、そして現在は埼玉県製糸協会と養蚕に携わり、約50年という長

い月日を重ねてきました。農家にとっては良い繭が取れて当たり前なので、責任は重大です。だから「良い繭が取れたよ」と声を掛けてもらえると、努力が報われ、喜びも得られます。かつて地区ごとにあった飼育所も、今はここだけとなりました。平成6年の繭・生糸の輸入自由化をきっかけにますます養蚕農家が減り、今では担い手の高齢化という問題もあって厳しい現状です。

養蚕農家の負担を減らすため、以前は桑の葉を与えて飼育を始める掃立から2令(7日目)で養蚕農家に渡していたのを、3令(12日目)に延ばすなど工夫しています。ですが養蚕を取り巻く環境は、現状維持で精一杯です。現在、秋平小学校では養蚕の体験学習を行っています。こうした活動を通して養蚕に興味を持ち、養蚕を継いでくれる人が出てきてくれたらありがたいですね。